

甘樫丘東麓遺跡 SK189 の土器

—第157次

1 はじめに

甘樫丘東麓遺跡SK189は、飛鳥藤原第157次調査で検出した谷SX188と、その東岸に築かれた石垣SX100cを埋め立てた後に形成された塵芥処理土坑で、埋土から焼土や炭化物とともに整理用木箱に3箱分の土器が出土している。出土土器は、概して細片化していることに加え、埋没後の湿度環境が繰り返し変動した影響で土師器の器表面の剥落が著しく、必ずしも良好な資料ではない。このため、調査概要を掲載した『紀要 2010』では詳細を報告していなかったが、谷の埋立てという大規模整地工事で甘樫丘東麓遺跡の景観が大きく改変された時期を考える上での重要な手掛かりであるため、今後の研究に資すべく、紹介することとした。

2 出土土器

SK189出土土器は、土師器と須恵器からなる。土師器には杯C・高杯C・鉢・甗があり、須恵器には杯H・杯G・杯G蓋・壺・甗がある。直接的に個体数の比率を示すものではないが、破片では土師器煮炊具が目立ち、須恵器の壺・甗類はわずかである（図150）。

1～7は土師器杯C。器表面の剥離が著しく、成形・調整痕跡がまったく観察できない7を除き、いずれも内面から口縁部外面をヨコナデした後、内面に一段放射暗文を施しており、5・6の底部外面にはさらにヘラケズリを加えている。1の復元口径は9.6cmで、口縁部残存率は約10%。2の復元口径は10.0cmで、口縁部残存率は約20%。3の復元口径は10.2cmで、口縁部残存率は約15%。4の復元口径は10.2cmで、口縁部残存率は約10%。以上4点の胎土は、ややくすんだ橙色を呈し、微細な長石・石英粒を含む点で共通する。5の復元口径は11.6cmで、口縁部残存率は10%弱。6の復元口径は11.8cmで、口縁部残存率は15%弱。5・6の胎土はいずれも明赤褐色で、微細な長石粒を含む。7は復元口径15.8cmで、口縁部残存率は20%強。器形からみて、内面には放射暗文が施されていたであろう。胎土はややくすんだ橙色で、赤褐色のクサリ礫粒子を含む。

8は土師器高杯C。器表面が劣化していて不明瞭だが、杯部内面に一段放射暗文、底部内面に螺旋暗文を施した形跡がわずかに残る。胎土はややくすんだ橙色で、微細な長石・石英粒を含む。

9は土師器鉢。復元口径33.6cmで、口縁部残存率は約25%。内面から口縁部外面をヨコナデした後、内側面に二段放射暗文と連弧暗文、外側面に比較的密なミガキを施しており、胎土の特徴は8に類似する。

10は土師器甗。復元口径27.0cmで、口縁部残存率は約15%。器表面の摩耗が著しく成形・調整痕跡は不明瞭だが、内外面とも胴部をオサエとナデで成形し、口縁部をヨコナデしているようだ。明赤褐色の胎土は、粗い長石・石英粒や暗赤褐色のクサリ礫粒子を多く含む。

11は土師器甗。復元口径は26.0cmで、口縁部残存率は約30%。胴部をナデとオサエで成形した後、口縁部をヨコナデ、外側面を縦方向のハケ、口縁部内面を横方向のハケで調整し、底部外周にはさらにヘラケズリを加えている。胎土はやや黄ばんだ明赤褐色で、粗い長石・石英粒や暗赤褐色のクサリ礫粒子を比較的多く含む。外面には煤が顕著に付着する。

12～15は須恵器杯H。12の復元最大（蓋受け）径は11.6cmで、蓋受け部残存率は15%弱。比較的硬質の焼成で、わずかに青みを帯びた灰色の胎土には微細な長石・石英粒を含む。ロクロからの切離し後、底部外面に回転ヘラケズリを加えている。13の復元最大（蓋受け）径は11.4cmで、蓋受け部残存率は25%弱。硬質の焼成で、やや青みを帯びた灰色の胎土は微細な長石・石英粒を含む。焼成時の降灰の影響で、ヘラでロクロから切り離した後、どのような調整をおこなっているのかは不明瞭。14の復元最大（蓋受け）径は11.5cmで、蓋受け部残存率は15%弱。硬質の焼成で、灰白色の胎土は緻密。ロクロからヘラで切り離した後、底部外面に軽くオサエを加えているようである。15の復元最大径は12.8cmで、蓋受け部残存率は約55%。硬質の焼成で、わずかに青みを帯びた灰色の胎土は緻密。底部外面に回転ヘラケズリを施しているようだが、痕跡は不明瞭。内面には、ヘラ記号風の二条の焼成前線刻がある。

16～19は須恵器杯G蓋。いずれも頂部には、内面にロクロからの切離しに起因する歪みを修正するために加えた非ロクロのナデ痕跡、外面に鈕貼付け前に施した回転

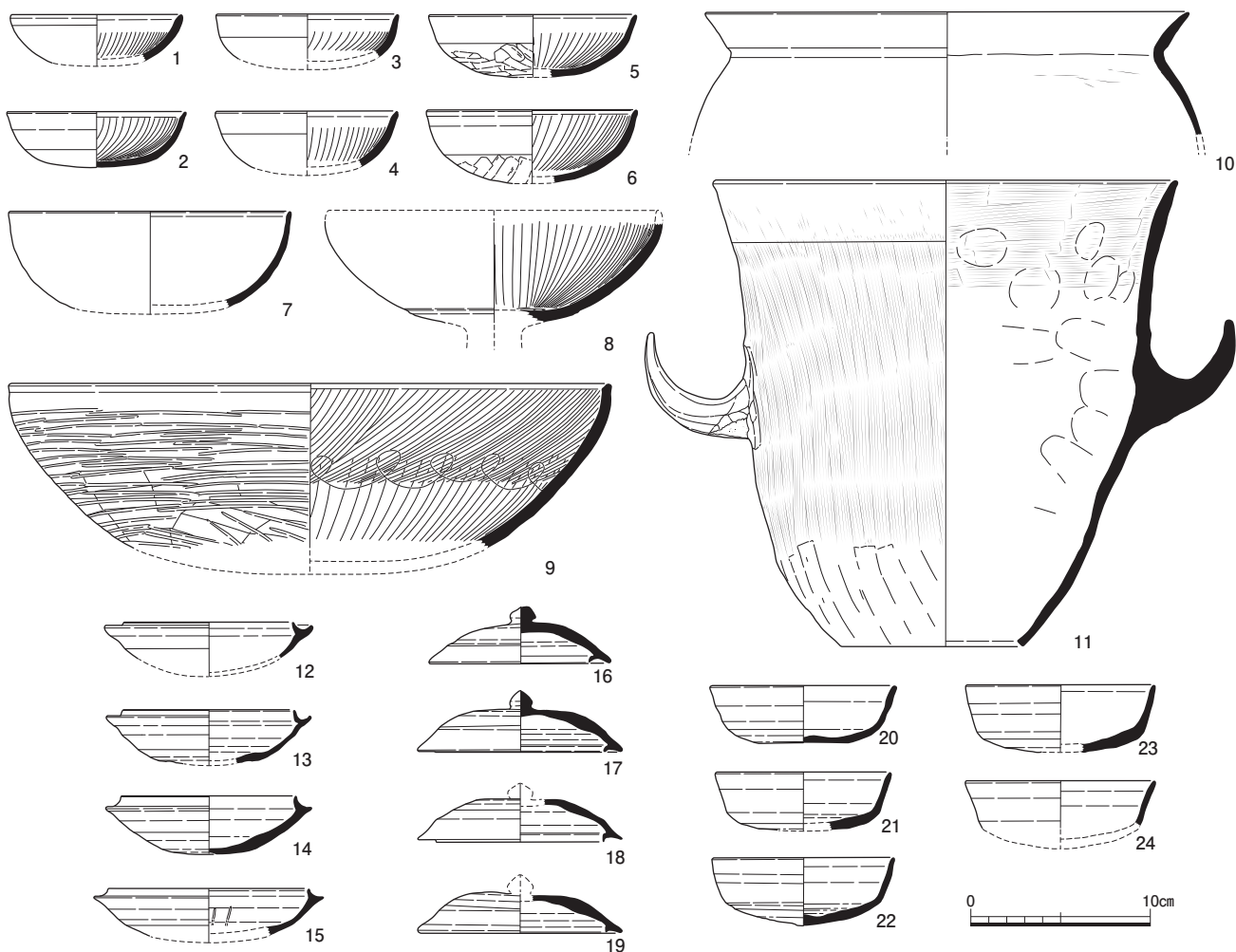


図150 土坑SK189出土土器 1:4

ヘラケズリの痕跡が残る。16の口径（実測値）は10.1cmで、口縁部残存率は約95%。硬質の焼成で、暗灰色の胎土には粗い長石・石英粒を比較的多く含む。ガラス質化は顕著でないが、外面に焼成時の降灰が付着する。17の復元口径は11.4cmで、口縁部残存率は50%弱。硬質の焼成で、胎土の特徴は14に類似する。18の復元口径は11.4cmで、口縁部残存率は20%強。外面は焼成時の降灰が厚く付着していて調整痕の観察が困難だが、胎土の特徴は13に類似する。19の復元口径は11.4cmで、口縁部残存率は約45%。硬質の焼成で、胎土の特徴や成形・調整手法は17に類似する。

20～24は須恵器杯G。底部を欠く24を除き、ロクロからの切離しに起因する歪みを修正するため底部内面に加えた非ロクロのナデ痕跡が残る。20の復元口径は10.4cmで、口縁部残存率は10%弱。硬質の焼成で、やや青みを帯びた灰色の胎土は緻密だが、微細な長石・石英粒を含む。底部外面には逆時計回りのロクロで回転ヘラケズリを施している。21の復元口径は9.8cmで、口縁部残存率は約20%。硬質の焼成で、暗灰色の胎土は緻密だが、微細な長石・石英粒を含む。底部外面に時計回りのロクロによる回転ヘラケズリの痕跡を残す。22の口径（実測値）

は10.2cmで、口縁部残存率は約85%。硬質の焼成で、胎土の質感は13・16に類似する。底部外面に時計回りのロクロで回転ヘラケズリを施している。23の復元口径は10.6cmで、口縁部残存率は20%弱。硬質の焼成で、胎土の質感は17・19と共通する。底部外面はロクロからヘラで切り離した後、軽くオサエを加えただけのようなのである。24の復元口径は10.6cmで、口縁部残存率は約25%。硬質の焼成で、やや青みを帯びた灰白色の胎土には、やや粗い長石・石英粒を含む。

3 まとめ

底部を欠く小破片が多く、いささか信頼度が低いものの、土師器杯Cの径高指数は概ね30～37の範囲に収まるようで、飛鳥Iでも新相を示す土器群として既に報告した甘樫丘東麓遺跡SK184出土品（『紀要 2010』）や飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層出土品（『藤原概報 22』）に近似した数値を示す。須恵器杯Hは、12.8cmとやや大型のものを1点含むが、最大（蓋受け部）径は11.5cm前後に集中しており、この点でもSK184出土土器群や飛鳥池灰緑色粘砂層出土土器群との類似性は高く、ほぼ同時期の土器群と評価できる。

（尾野善裕／京都国立博物館）